

ぼっちネットゲーマーのぼくが 爆発対象のリア充になるまで

木森山水道

挿絵／わつきるみ

立ち読み版





AVATAR
ミサキ
JOB
侍

玲奈と結に誘われて、ゲーム「アマテラス」を始めた女子校生。人の悪意に敏感で、女侍のジョブについて玲奈や結が楽しくゲームを行えるように守ろうとする。



あまかせ・みさき

天風美咲



AVATAR
マリン
JOB
商人

御海道商会の令嬢で、美咲たちを「アマテラス」に誘う。将来、商会を継ぐことを考えて「アマテラス」で商人として商売を体験したいと考えている。



みかいどう・れいな

御海道玲奈

地陸結

ちりく・ゆい



美咲や玲奈とともに「アマテラス」をプレイする元気いっぱいの子。魔法をバンバン使いたくて、ゲーム内ではエルフ族の魔法使いとなる。



AVATAR

リッカ

JOB

魔法使い

青森俊一郎

あおもり・しゅんいちろう

「アマテラス」でボランティアとして初心者支援を行う少年。最高レベルに達しているプレイヤーの一人だが、現実でもゲームでも実はぼっちで、仲間を探している。



AVATAR

ピッド

JOB

盗賊

KNOWLEDGE

「アマテラス」とは？

世界中でプレイされている体感型オンラインRPG。五感を完全に再現するバーチャルリアリティのもと、プレイヤーはゲームの世界で現実さながらの冒険を行うことができる。ゲーム内でのセックスも可能で、プレイヤー同士の恋愛を運営も推奨している。

軽い気まずさを覚えて訊ねると、横から畳みかけられた。

「えー！ 美咲ちゃん、【アマテラス】を知らないの！」

冬の寒さが満ちていく教室でも、夏の太陽を思い出させる声だった。

ゴム底の上履きをパタパタ鳴らして寄ってきたのは、地陸結だ。

「流行ってるんだよ？ テレビでいっぱいCMしてるし」

栗色がかった髪をお下げにした愛くるしいクラスメイトが、唾を飛ばして詰め寄る。

「私、テレビはほとんど見ないから」

「ふーん。それじゃ、見せてあげる」

結がポケットからケータイを取り出す。

手のひらサイズの薄い端末で、見た目は十年以上前のスマートフォンと変わらない。

「あー、青森くんごめん！ あたしがやるよっ、日直だもん」

ケータイを操作しかけた結が、黒板を念入りに消し始めた男子のもとへ走っていく。

「い、いや……ぼくも日直だから」

おどおどした声で男子が言う。黒板を綺麗にするのは日直の仕事のひとつだった。

「この間の日直の時、仕事をほとんどやってもらったから、今度はあたしがするって言うってたじゃん。青森くんは帰っていいよ」

「……この間は……地陸さんはさぼったんじゃないなく、チアリーダーの部活って大事な用事があったんですから。ひとりやっておくって言い出したのもぼくだっただし……」

目の前の結を見ずに俯いて喋るが、妙に頑なだった。

「埋めあわせさせてよ、ね？」

結も引かず、両手を取ってにつこり笑う。

「うわあっ……！」

真っ赤になった男子は、慌てて結の手を払った。

「わ、わかりました、お願いします」

「ごめんなさいっ。友達でもない女子に手なんか握られて嫌だったよね。あたしったら、思うよりも先に身体の方が先に動いちゃって」

「嫌だなんてとんでもない……！ 柔らかくて、あつたかくて、すべすべした華奢な手が一生懸命にぼくの手を握って……あ、いえ……ぼくの方こそ乱暴ですみませんっ」

首も両手もブンブン振って否定のジェスチャーをした男子が、こほんと咳払いする。

「それじゃ、ここはぼくがやります。地陸さんは先生に日誌を届けてくれますか？」

「うん、わかった」

「日誌はぼくの机の上です。全部書いておいたので、渡すだけですから」

「うわあ、ありがとう。ひとりでやらせてごめんね」

男子に拝む仕草をした結は、日誌を持って走り去った。

「どうする玲奈。結は行っちゃったけど、最初に話を持ってきたあなたが、あまてらすつてもものの説明をしてくれるの？」

小柄な結では、いくら背伸びをしても黒板の上まで届かないと思っただろうか。日直の男子——青森俊一郎が大急ぎで黒板を綺麗にしているのを後目に、美咲が訊ねる。

「やる気満々だったあの子を差し置いて、というのは野暮ですわ」

向かいに座る玲奈と、見るともなしに青森の仕事を見ているうちに結が戻ってきた。

「たっだいまー！ 先生に渡してきたよ！」

「……お疲れさまです、地陸さん。こっちも終わりました」

「青森くんもお疲れさまっ」

「日直の仕事はこれで終わりですので。ぼくは帰りますね……」

愛想よく手を振る結に会釈をし、青森は教室から出ていった。

「あたしたちも帰ろっか」

美咲と玲奈が顔を見合わせる。

「あまでらす、というもののCMを見せてくれるんじゃないやなかつたの？」

「……おお！ そうだ、その話があつたんだっけ」

結はスカートのポケットからケータイを取り出し、猛烈な速さで画面を叩いた。

ブウン……。

ケータイの少し上にホロビュウが浮かび上がる。

スマートフォンが流行した時代以降の技術革新のお陰だった。今のケータイには立体映像を見られる機種がある。

『明るい社会。明るい未来。人が幸せに暮らすためのアマテラスプロジェクト』

落ち着いた女性の声のナレーションと同じ文字が画面いっぱいに浮かぶ。登録ユーザー一千万人突破記念イベント開催中というテロップが流れた後に画面が換わり、国や県の名前と、幾つかの企業名が列挙されて終わった。

「どう？」

「……ありがとう結。けど、典型的なお役所センスのCMじゃねえ……」

よくわからなくて美咲が戸惑っていると、

「わたくしがご説明いたしますわ」

玲奈が助け船を出した。

「【アマテラス】とは、極めて高度なオンラインゲームですわ」

「現実そっくりの世界で、みんなとロールプレイングするんだよね！」

玲奈の説明に、結が合いの手を打つ。

「オンラインのロールプレイングゲーム……テレビゲームもネットゲームも、兄さんたちとたまに遊ぶから何とかわかるけど……極めて高度ってどういうこと？」

「これはゲームの中に意識を飛ばしてプレイするものなのですけれど、ゲームの中では現実と同じ風に五感を楽しめるのですわ」

「別世界に飛ばされて冒険しちゃうって感じ！」

美咲は目を丸くした。

「へえ……ちよつと信じられない話ね。映画か何かみたい」

しかし、玲奈と結が嘘をつくとは思えない。本当にそうなのだろう。

「でも、意識をゲームの中に飛ばすなんて危険じゃないの？」

浮かんだ疑問を口にする、玲奈が勢いよく立ち上がった。

「オゝホッホ！ 心配はいらなくてよ美咲！」

腰に手を当て、逆の手の甲を口元に添え、倒れた椅子よりもけたたましく高笑いする。

「先ほどのCMには、わたくしのお父様の御海道商会の名前もありましたでしょ？」

「そういえば……主催者のところにあつたわね」

思い出しながら美咲が言うと、玲奈は我がことのように誇る。

「テストは念入りに行われて、安全管理も万全。プレイヤーの生命や身体に危険が及ぶ事

故はこれまで起こっておりませんわ！」

「開発者や機械が暴走して、プレイヤーをゲームに閉じ込める、とかは？」

冗談めかして結が言うと、玲奈は高笑い混じりに断言した。

「ありえませんが！ だからわたくしも、大事な友達的美咲を誘いましたの！」

「えー！ 美咲ちゃんだけ？ あたしは誘ってくれないの？」

「もちろん、結もお誘いするつもりでしたわ。そのため三枚のチケットですよ」

「やったー！ 【アマテラス】はやってみたかったんだよね！ 結構お金かかるからやれ

なかつたけど……」

美咲の机の上のチケットに、結が目を輝かせる。

「この、一ヶ月無料って書かれてるチケットで、一ヶ月ロハで遊べるんでしょ？」

「その通りですわ。わたくしと結と美咲で、まずは一ヶ月プレイしますの」

と、玲奈が神妙な顔をした。起こした椅子に座り、美咲と視線を合わせる。

「受け取ってくださいるかしら」

「そうね……」

美咲は迷った。

気の置けない友人が、真剣に誘ってくれているのはわかる。

これが他のことなら、ふたつ返事で承諾しただろう。

しかし、今回はことがこと。

ゲームの中に意識を飛ばすなど今までしたことがないだけに、いくら安全と言われても抵抗がある。恐怖と言ってもいい。間違いが起これたら、三人はどうなるのか？

(けど、断るのも……)

大好きな友達が、一緒に遊ぼうと言ってくれる。

玲奈との付き合いは半年になるが、ここまで熱心に遊びに誘われた覚えがない。もしも嫌だと言った時、彼女は酷く落胆するのでは？ 誘いを断ることは、彼女との繋がりを自分で切るのと同じではないのだろうか。

(それもやだなあ……)

一緒にいて心地いい友達を失うと思うと心臓が気持ち悪く拍動し、胸が痛む。

「無理強いはいたしませんわ。変なお誘いをしてごめんなさい」

断りあぐねて黙り込んだと判断したらしい。玲奈がすまなそうに目尻を垂らす。

いつも自信たっぷりで、事あるごとに高笑いする令嬢とは思えない、捨てられた子犬のような哀愁を漂わしている。とても見ていられない、悲しそうな様子だった。

「玲奈………私もやってみたいわ。三人なら、きっと楽しいよね」

無意識に出た言葉に、玲奈が表情を明るくした。

「ありがとう美咲！ わたくし、とつても嬉しいわ！」

「あたしも！ あたしも一緒にやるんだよ玲奈ちゃん！」

「ええ、結もありがとう。わたくしは幸せよ」

大人びたお嬢様が、子供のようにニコニコする。

「でも、玲奈がゲームに興味を示すなんて意外ね。【アマテラス】で何をしたいの？」

疑問に思った美咲が訊ねると、結が威勢よく手を挙げた。

「はい、はーい！ あたしは魔法使いになって、魔法をバンバン使ってみたい！ 現実じゃ、どうやっても無理だもんね」

玲奈を押しつけて言った元気なクラスメイトは、小鼻を膨らませている。

「それは面白そうね。なら私は、剣を使って敵を斬りまくろうかしら」

街の剣術道場の娘であり、学園の剣道部員も敵わない美咲が楽しそうに言う。



「うんうん、美咲ちゃんほとんどリアル武家の娘だから、騎士とか剣士よりも侍になったらいいと思うよ。すごく似合うと思う」

ポニーテールの友達のことを色々知っている結が相づちを打つ。

「わたくしは商人になりたいですわ」

焦れつたそうに会話に入って玲奈が断言する。

「御海道家の息女として成長してきたわたくしが、現実とは異なる世界で経済的に成功できるのか……試してみたいんですの」

「御海道のお嬢様の玲奈は、学園の勉強とは別に家で英才教育を受けてるんだっけ」

「向上心が強くて誇り高い、漫画のお姫様みたいな玲奈ちゃんらしい気持ちだね」

「大したことはありませんわ！ でもわたくし他にも希望……いえ、欲望がありますの」
欧米人らしい白くてなめらかな細面が、紅葉のように赤らんだ。

「あれ、どうしたの玲奈ちゃん。風邪？」

「違いますわ……その……わたくし実は……」

現在教室に残っているのは、気の置けない友達だけだった。

なのに声を低くする。

（他人に聞かれたくないってだけじゃない。すごく言いにくいことなんだわ）

美咲は気持ちを引き締めた。全身全霊で、親友の言葉を聞きにかかる。

「こんなことを言うとは軽蔑するでしょうけれど……」

「そんなことあるはずないでしょ。私、玲奈は大好きよ。それに、あなたの素敵なところをたくさん知ってる。何を言われたとしても、この気持ちが変わるなんて考えられないわ」

「あたしも！ 風邪でも風邪でなくとも玲奈ちゃんは大好き！」

「ありがとう……わたくしは果報者よ。ふたりに聞いてもらおう決心ができましたわ」
碧眼を潤ませたお嬢様は、おずおずとこう言った。

「牝ブタと呼ばれて責められる、倒錯的なセックスをしてみたいの」
「うん？」

結は首を傾げた。恐らく、意味がわからなかったのだろう。

「そ、それは素敵ね。玲奈らしいわ」

他方、十全に言葉の意味を理解した美咲は、動揺を抑えて合わせる。

「ありがとう美咲。わたくし、とつても嬉しいわ」

ゲームプレイを承諾した時以上に目を輝かせる玲奈。

思いきって告白した変態性癖が拒絶されなかったのに、心底安堵している風だった。
（人の好みはそれぞれだもの）

なかなか動揺が収まらない自分に言い聞かせるつもりで、胸中で呟く。

以前、旅行に出かけた一番上の兄の部屋を親切心から掃除した時、いやらしい本を見つけたことがある。得体の知れないシヨックに襲われ、大好きな兄を穢らわしく思ったが、帰ってきた兄が自分好みのお土産をくれた時にハッとした。

「ご近所や兄を知る人はよく「いいお兄さんね」と言う。決して美形ではないが、穏やかで心配りができて意志の強い兄は、そう呼ばれて当たり前だと自分も思う。世間には仲の悪い兄妹もいるが、自分にとって兄は誇りであり目標であり、愛しあう家族だった。

玲奈も同じなのだ。

正直、変態的な欲望は理解しかねるが、彼女にはいいところがたくさんある。理解できない部分があるからと言って、全部を否定したり拒絶するなど馬鹿げている。

自分はずつと玲奈と友達でいたいし、彼女も多分、そう思ってくれている。なら、自分から絆を断ち切る真似に価値はない。一時の感情や世間の常識に捕らわれて、大切なものを失うなど愚の骨頂だ。

「……ところで、セックスってできるの？ ゲームの中で」

他に誰もいないのはわかっていたが、万一聞かれたら恥ずかしい。玲奈みたいなひそひそ声で浮かんだ疑問を口にする、彼女はひそひそ声で言いきった。

「可能ですわ」

「ひめちゃん【アマテラス】で彼氏としてるって。現実同然の感覚、って言った」
世間話でもする風に結が言った。普段と変わらない口調の彼女の言葉に玲奈が頷く。

「【アマテラス】のリアルさは性行為にも適用されていますの」

「お役所も絡んだ事業なのにオーブンなのね……ちよつと信じ難いわ」
話を聞いていると、頬が熱くなってきた。

気心の知れた友達同士とはいえ、猥談じみた話に処女の乙女は気恥ずかしい。

「晩婚化や低出生率を解決するために、セックスを体験できる場を設けるというのが理由なの。そうすることで、人と人の繋がりを強くすることも狙っているのだとか」

「【アマテラス】って、結構前からあったと思うけど効果は出てるの？」

「ええ。この国の現在の人口は、最新の国勢調査によると一億三千万強。婚期の低年齢化や出生率の微増が年々起こっていて、夥しい数の自治体が消滅するという二十年前の未来予想に反する結果が出ておりますの。出産一時金や育児給付金の制度を利用する人の三分の二近くが、ゲームの経験者という統計もありますのよ」

「プレイヤー同士のお見合いやオフ会も、運営さんが設定したりするんだよね」

「ただ、性行為も可能な仕様なだけに、プレイするには年齢制限がありますの。男女共に、民法が定める婚姻年齢ですわ」

「ゲーム中で仲よくなったら、お前ら結婚しちゃってことかな」

「そういう面もあると思いますわ。もともと、結婚は当事者が好きあつていればそれでいいというものではありませんけれど」

言葉と切った玲奈が、じつと美咲を見詰める。

「何？」

「美咲は男子に興味になさそうだけれど……セックスに興味ありませんの？」

「な、何を聞くのよいきなりっ」

明け透けに訊ねられたのに驚いて、まともに声が上擦った。

「わたくしの破廉恥な欲望を聞いたのですもの。教えてくださってもよくなくて？」

「そっちから教えてくれたんじゃないの……いくら、大好きな玲奈だって」

「もしかして、女の子の方に興味がありますの？」

「えっ……？」

「このわたくしを、赤裸々な欲望をぶつける対象として見てくださっていると……だとしたら気づいてあげられなくてごめんなさい。御海道玲奈、一生の不覚ですわ」

「違うってば！ 玲奈が大好きって、そんな大好きじゃなくて……ああ、もうっ……うん……うちの兄さんさえ興味津々だから、ちよつとはしてみたいかしら……でも相手がないわ。同級生なんて兄さんと比べて子供すぎるから、心も身体も許したいなんてとても思えないもの」

「そうですね。真面目で奥手な美咲らしい興味レベルですわね」

普段は絶対に見せない、妙に悪戯っぽい笑みを玲奈が浮かべる。

「む、そのしたり顔……玲奈の口車に乗せられて、まんまと白状させられたのね私」

「ウフ、ごめんなさい美咲。お詫びはゲームで。欲望解消のお手伝いをいたしますわ」

「【アマテラス】だと、ビョーキの心配はないし、本名を知らせないで色々できるから便利だって、ゆうこちゃんが言ってた」

「ひめだけじゃなくゆうこも？ うちのクラスメイト連中は……結はどうなのよ」

「あたし？ あたしはそういうのは興味ないな。いっぱい魔法が使えて、ゲームの中の美味しいものを食べられて、美咲ちゃんと玲奈ちゃんと楽しくできたら十分！」

食いしん坊の結が元気に言った。

「ゲームの中は現実そっくりって聞いてはいたけど……味覚や嗅覚もあるの？」

「リアルな五感がウリだからね。ゲームの中で飲食してもお腹は膨れないそうだけど」

「百聞は一見に如かずですわ。美咲、結。【アマテラス】の施設に参りましょう」

玲奈の言葉に頷く三人。いそいそと帰り支度を済ませると、冷えきった教室を出た。

玲奈に案内されたのは、学園から徒歩で二十分の県庁舎。彼女と結が言うには、自治体が絡んでいるだけに、【アマテラス】用のスペースがある公的機関は少なくないらしい。

受付に学生証と無料券を渡して登録を行い、指紋認証での本人確認を済ませ、プレイヤーのIDカードを受け取った後、玲奈の素性が知れてVIPルームへお連れしろ、だのと職員が騒然とする一コマもあったが、【アマテラス】の一般向けの端末がある場所に三人で向かった。

「遊園地の屋内アトラクションみたいなどころね」

見回しながら美咲が呟く。

広さは学園の体育館の半分ほど。百席分の黒くて地味な、肘掛け付きのリクライニングシートが方形に並んでいて、席の間は人ひとりがゆったり通れるほど空いていた。

「そんな……欲望を丸出しにしるというのか……私は女なのに……」

性交快楽に対して積極的だったミサキも、いざとなつて乙女らしい羞恥を覚えたらしい。浅瀬を何度も擦られた後に思いきり子宮口を押し上げられる抜き差しを受けながら、葛藤する風に眉根を寄せる。

「無理なら終わりにしましょう……んっ……心の整理がついたまたの機会に……」

「またの機会……?」

オウム返ししたミサキは、次の瞬間、弾かれたように叫んだ。

「ダメだっ! ふたりきりでいられるのは今日だけなんだぞ……明日からはマリんとリツカが復帰する……そうしたら、主殿と睦める機会が減るに決まっている。いいや、もうないかもしれないのだ!」

ミサキは、欲望の火を燃え上がらせた潤み目で見詰めてきた。

「ここまできて……散々、果てたいと言っておきながら躊躇する私がどうかしていた……主殿、私はあなたに果てさせてもらいたいっ。欲望を丸出しにして協力するから、どうか一緒に……!!」

「欲望に従つてくれてありがとうございます。ぼくを選んでくれたことにも、感謝の言葉もありません……果てることは別に恥ずかしいことではないんです。いつも頑張つてくれる身体を労つて、心を満たす神聖で尊い儀式なんですから……それをミサキさんと行えるぼくは幸せ者です」

いじらしい乙女侍の存在感をもっと感じたくて。

ふたりに性交の快楽をわかちあいたくて。

ミサキも気持ちよくなって欲しいと思いつながら、腰振りを徐々に激しくしていく。

「んっ、くううッ、はあ、ああッ~~~~! あっ、あっ、な、何なのこれは、んくっ、目の前で星が散って、ただ、もっとして欲しいとだけしか考えられない……!」

乙女侍はピッドにしがみつき、息を合わせて腰を振る。

心から信頼する盗賊青年の意志に反することは決してせず、深く貫いて欲しくても、彼が浅瀬を擦っている時はそれに合わせ、深々と貫かれると察した時はディープキスでもするかのようにペニスの根本に秘唇を押しつける。

「くうっ、ああ、ミサキさんの絡んで、奥に引っ張られる……!」

膣に包まれる強さは、胸で挟まれるよりも強いものの、自分の手で握るよりもずっと弱い。ゲーム内で強くなった女侍のものであっても、男の握力には数段劣る。

しかし、肉棒の表面のすべてを柔らかくて熱い粘膜で包まれるのは、すぐにでも射精しそうな心地よさ。

よがる乙女侍の子宮口が降りてきて、膣の収縮が激しくなるにつれ、奥に引っ張られる快感はオナニーでは味わえない、オナニー以上に病みつきになる悦びになっていた。

ペニスはもう、男の快楽と欲望の塊になっている。

ミサキの女壺に子種を吐き出したくてうずうずしていた。

「はああつ、か、身体が熱くて、溶けてしまうようなこの感じ……あああつ、怖い、だがつ、これが果てそうだとしたことなのだなッ？ この先に、絶頂が待っているのだな！」

「そうですねミサキさん、力を弛めないで、そのまま、最後まで身体に力を！」

「わかつている主殿！ 私は果てるつ、主ペニス殿に果てさせてもらつて、主ペニス殿に私の秘芯で果ててもらいたい……あうつ、あんつ、あんつ、ああ、果てるつ、私は果てるうううッッッ！」

手甲の手で盗賊青年のジャケットに深い皺を刻み、ニーソックスと脚絆のガニ股が小刻みに震えるほど脚を強張らせる。

「果てさせます！ ミサキさんをぼくのでつ、そしてぼくもすぐに！」

ペニスで感じる限り、膣の収縮は最高潮に来ている風に思えた。

法悦の涙をだくだく流しながら、唾を飛ばして絶頂申告をするミサキの様子にも、余裕はほとんど感じられない。

四度浅瀬を擦った後、乙女侍を絶頂に押し上げる気で、とびきり重く最奥を突く。

「主殿つ、主殿おつ、主殿おッ！ 私は、あなたのミサキは果てます、あなたの主ペニス殿に果てさせていただきますッッ、あッ、は、果てるつ、果てるウウウウ~~~~~！」

武家の娘然とした凜乎とした美貌からも、全身からも一気に力が抜けた。

だらしなく開いた口から舌が飛び出る。

汗で煌めく真つ赤な顔は、心を解放して性交快楽を享受する女の蕩け顔だった。

「あううううツツツ……あぐああああああんんんツツツツツ……!!!」

絶頂の波に翻弄されるミサキの全身が、お腹を中心にガクガク揺れる。

（果てるって言う余裕がないくらい絶頂してる……ぼくはミサキさんをイカせた！）

ひとりの男として女性にオーガズムを与えられた悦びが弾ける。

ゲームでも現実でもひとりぼっちの自分を受け入れてくれる美しい乙女と、最高の瞬間をわかちあいたくて、

「ぼくも果てます、ミサキさんの中で射精させてください！一緒に絶頂を！」

「ああ、ああ！主殿も一緒に、一緒に果てて！私に女の悦びを教えてくださいましたあなたの精液で、私の身体を満たして欲しいの！」

途中からは現実のミサキの口調だったのだろう。

そうとわかると、嬉しくて堪らなかった。

ミサキは心から自分を求めてくれている。

「ミサキさん！大好きですミサキさん！ああ、ああ出るうツツツ!!!」

崩れ落ちそうな淫猥ガニ股侍の腰ごとお尻を抱きしめながら、股間同士を張りつかせ、奥の奥までペニスを潜り込ませて、

ドビュウウツツ！ ビュブブブブ！ ビュルウウウウウウウウウウ……!!!

一心不乱に射精する。

「はううううツツツ！ お、お腹が、熱いつ……主殿が精液を出して……射精してくれて

いる……私と一緒に果ててくれている！ 嬉しいっ！ もっと出して主殿っ、私の中を主殿の精液で満たして、たふたふにして！」

「ああ、ありがとうミサキさん、愛してます、ぼくの愛でいっぱいになって！」
許されるままに、精液を吐き出す。

熱い樹液は、下がってきていた子宮口を濡れさせ、肉棒を奥に引っ張る処女媚肉のヒダの隅々に染み渡る。

見た目には隙間のない結合部からドロリと垂れて、戦う女らしいミサキの太めの太股を伝い、黒い長靴下に黄ばんだ粘液の跡をつけていく。

「はああっ……ああ……主殿……主どのお……私のアソコが蕩けてるのお」
「ぼくも……こんなにペニスが気持ちいいのは初めてです……」

ピッドはこれまで体験したことのない、肉棒が蕩けた風な牡の悦びの中で、ミサキは未体験の牝の悦びの坩堝くわぼに飲み込まれながら、

「ありがとう……」

目眩い絶頂をくれたパートナーに感謝を伝えるのであった。



「は、はいですわ！ 連れて行ってくださいませ、ご主人様、あんツ、あんツ、あんツ、わたくし、あなた様に牝イキさせて欲しいですの！」

盗賊青年は従順に返事をしたマリンを責め立て、

「あ、んツ、いいっ、んツ、あッ、これ、この感じ、い、牝イキしますのッ……!?!」
身体が石のように硬く緊張した瞬間を狙い撃ちする。

（今だっ！）

両手のひらを尻タブに張りつかせ、結合部から滴る愛液がそこかしこに飛散する勢いで腰を打つ。今にも射精しそうな亀頭の前で、最も弱い最奥を突き上げ、子宮をも揺すぶる。「ハアアッ、ハアアッ！ すごい、すごいいいッ、身体が熱くて、い、意識が、意識が翔びそうッ、はあッ、はあアアッ、牝イキ、牝イキですわッ、ご主人様のおペニス様でわたくし、め、牝イキ、牝イキいいイインンンンン~~~~~!!!」

必死に指を噛みながら、くぐもった声で絶叫するマリリン。

バックから根本まで挿入された状態で、身体を仰け反らせる。

尖り乳首の豊胸が、下乳が裏返るほど跳ね上がった。

汗濡れした金髪は躍り、甘い体臭を含んだ滴が周囲に飛び散る。

（よし！ よしッ！ マリンさんを牝イキさせたぞ！ 嬉しいなあ……ぼくはミサキさんに続いてこの人もイカせることができたんだ）

男として意中の女性に最高の快楽を与え、自分を求めてくれた彼女の期待に完璧に応え

られた達成感を嘔みしめた後、

(あとには中にたつぷり射精して、もっと強烈にぼくのことを印象づけるんだ)

自分の欲望を叶えにかかる。

肉棒は熱い鉄串めいていた。射精衝動は根本で煮え滾っていて、すぐにでも放てる。

「マゾ牝ブタのマリンさん、このまま出しますよ、いいですねっ！」

マリンは肩で息をしながら弛緩していた。

すがる風に壁に手をつけて、左手の薬指の指輪を光らせている。

「あうう……んん……は、はいですわぁ……わたくしを牝イキさせてくださいったご主人様の精液で……はぁ……はぁ……中を満たしてください……あぁ、牝イキが幸せすぎ
てえ、そうされたくて堪りませんのお」

「ありがたい、マゾ牝ブタさん！　これが、あなたを牝イキさせたご主人様の……今ではミサキさんも大好きな精液ですっ！　たつぷり出してあげますから、また牝イキ、キめてくださいねッ！」

ピッドはマリンを再度絶頂させるつもりで、思いきり腰をぶつけた。

白い柔尻を限界まで押し潰し、一番奥まで挿入する。

降りていた子宮口を亀頭で刺し、男の快感が爆発すると同時に精液を解放した。

ドビュウンンツツツツツッ！　ドグッッ！　ドグンドグン！　ドビュウウウウウウウッ!!!

最奥と密着した状態で、鈴口から精液が噴出する。

「ああああんあんあんアアツツツ……」

糸の切れた操り人形のようにぐったりしていたマリンが、再び仰け反った。

「あ、熱いですわ！ ドロドロのお汁がわたくしの中で弾けて……ンッ！ あああ、お勃起ペニスが、お射精ペニスになって、ドクンドクン震えながら、マゾ牝肉穴全部を揺すぶってますのオ!!!」

次々飛び出る精液に膣内を灼かれながら、指を噛んで声を漏らさないようにしつつもよがる。

(気持ちいいっ……ミサキさんと一緒にイク時くらい堪らないぞ)

絶頂して最高に狭くなった膣に締めつけられつつ、肉棒のすべてに絡む蜜ヒダに奥へと引っ張られながら、思う存分射精する。

自分の手ですてティッシュの中に出すのもいいが、自分の選んだ美女と汗だくになってセックスをして、共に絶頂し、そうしてする膣内射精は得も言われない。

ピッドは夢中になって腰を振る。

ゲームであつても本物と遜色ない若い樹液を、やはり本物と同じマリンの牝壺でぶちまける。抜き差しをするうちに精液が飛び散つても頓着せず、注げるだけ注ぐ。

「嬉しいですわア……ご主人様がイってくださつた……わたくしの中で……」

ひとしきり出し終えた時、マリンが陶然と呟いた。

「牝イキよかったですか？ ぼくの精液を出されたのは？」



「気持ち悪いですか？ やめましようか」

「そんなことは……ないです……や、やめなくてもいいです……ただ、はあ、はあ、こんな初めでの感覚ですっ」

「女だから味わえる快感だ。初めてだろうが怖がる必要はないぞ」

「わたくしたちも通った道を通って、リッカもこちら側へいらして」
心を込めてリッカを責め立てながら、同性の友人ふたりが囁く。

「こんな感じは、皆が知ってること……普通のことなんですか？ はあっ、はあっ」
舌でピストンする膣が、断続的に収縮する。

「痺れて、気持ちいいですっ……ピッドさんと、ミサキちゃんとマリンちゃんに大事に可愛がられてるって感じがして、しあわせな気持ちですッ、はあ、はあ、はあッ」

「これがぼくらのリッカさんへの気持ちなんです、じゅぶっ、じゅぶぶぶっ」
「わかってくれたか？ 口だけではないのだ」

「わたくしたちは本当にリッカが大切で、大好きですの。愛しておりますわ」

「うん、うんっ、信じられるっ、嘘じゃないってわかるです！ だって、嫌いだったり、いらなかったりする子に、こんなに優しく、恥ずかしいことをしてくれるはずないです……あああうああッ……！」

快楽の証の愛液で女壺をぐしょ濡れにしながら、リッカが喘ぐ。

「そろそろイってもらいますね……ミサキさんとマリンさんが何に病みつきになってるの

か、もっと深く知ってください」

スカートから出ない程度に頭を引いて舌を抜いた後、はつきりした声で告げる。

「い、いくつてなんですか？ はあ……はあ……はあ、リッカをどこかに連れてくです……？」

「性的絶頂のことだよ。保健体育でも言葉はでてきた。聞いていただろう？」

「イクというのは俗語ですわ……でも、本当にイクという感じですよ」

脇の下、乳房の付け根、顎の裏。これまでの愛撫で探り当てたリッカの性感帯を、撫でたり揉んだりキスしたりしてゆつたり責めながら、同性のふたりが説明する。

「我慢しないでいいんですからね。リッカさんの、誰にも見せない可愛いイキ顔を、マリンさんとミサキさんに見てもらってください……はむっ」

これ以上ないくらい秘唇と口元を密着させると、尖らせた唇でクリトリスをはむ。

「ふあああッッ！ なんですかこれっ、なんなんですかこれエ！」

雷に打たれたみたいに背中を震わせるリッカ。

従順に反応してくれるのに喜びを感じながら、ピッドは責め立てる。

唇で軽くクリトリスをはみながら口元をもごつかせると、太股が小刻みに震えた。

緩く頭を前後動させ、陰核の内部までシエイクすれば、腰全体が痙攣する。

唇を離して舌で転がすと、奥から愛液が押し寄せて、口内に流れ込む。

「ハアッ！ ハアッ！ ぴ、ピッドさん、あたし変ですっ、気が遠くなります！」

「変ではない。その、行くとか翔ぶとかいう感覚は自然な反応なのだ」

「身を委ねてリッカ。恐れることはありませんわ。新しい世界が開けるだけですの」
 性感でハリの強くなった乳房を優しく揉みしだき、ワンピースのカップの布まで盛り上がるほど勃起した乳首を摘んで転がす。顎の下やうなじ。探り当てた弱い部分に舌を這わせ、吸いつくのも忘れずに、マリンとミサキはリッカを高みに近づける。

「ミサキちゃん、マリンちゃん、ハーッ、ハーッ、ピッドさぁンンッッッ！」
 スカートの上から両手でピッドの頭を抱きしめる。

「いつてくださいリッカさん……マリンさんとミサキさんに、可愛いイキ顔を見せてください……ヂュルウウウウウウ……！」

限界が近いと判断したピッドが、クリトリスを思いきり吸い上げた。

「ひゃああつ、ああつ、あつ、あンンッ、ああ、い、いつちやうンッ……！」

散々教え込まれた言葉を発し、リッカが身体を仰け反らせる。

目に鮮やかな赤いワンピースのカップごと、勃起乳首の豊胸が跳ねた。

あられもなく開いた唇の端から唾液をこぼし、真っ赤な顔の眉目を蕩けさせる。

いつも明るい女の子は、理性や知性を女の快楽に洗い流された牝顔になっていた。

「可愛いぞ、リッカの果て顔は」

「イキ声もすごくいやらしくて素敵でしたわ」

「ぼくは顔を見られませんが、リッカさんがいつてくれたのを顔いっぱい感じてます」
 乙女の太股にぎゅっと挟まれた顔に、股間の絶頂振動が伝わってくる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

盗版フリーム系作品は、本来の著者の権利を侵害してはなりません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!